

ノンフィクション劇場

竹脇^{まこと}真理作・石井忠雄脚色 「**勇ましく高尚な生涯**」

ナレーション 竹脇君の家族は、兄と母がクリスチャンで、彼も小さいころから教会に通って
いました。彼にはほかに姉と弟と2人の妹がいましたが、彼らも一度は教会の
門をくぐったことがあり、キリスト教には理解を示していました。そんなことで、
彼は高校生の時にイエス・キリストを信じるようになり、友人にも熱心に伝道す
るようになりました。

(音楽) (ブリッジ)

(効果音) (歩道の足音)

竹脇真理 川橋君、君の人生の目的ってなんだね？

川橋 そりゃ竹脇、東大へ入ってさ、大会社に就職して、美しいすばらしい人と結婚
することかなあ。

真理 それは結構だね。でも、それが第一の目的かね？

川橋 そう言われりゃ、もっとほかにあるような気もするけどさ。…君は一体何を人生
の目的にしているんだい？

真理 そうだな。僕は信仰さ。

川橋 え？ 君はそんな不合理なものを人生の第一目的にしているのかい？

真理 そうさ。今の世の中はすばらしく科学が発達しちゃってさ。一日の生活から科
学を抜きちゃったら、お話にならないさ。でもね、科学の力で僕の心の中を根
っこから方向転換させることは不可能だよ。少なくとも神を信じて、神に従った
時にそれができたのさ。

川橋 そんなものかねえ。

真理 ところでさ、君、今日は暇かい？

川橋 うん。このごろ、家に帰ってもごろごろしてるんだ。

真理 そうか。そりゃちょうどいい。僕は、これから渋谷でやっている高校生の集会に
行くんだ。もちろんキリスト教のだよ。よかったら一緒に行かないか？ そんな
に遅くはないよ。

ナレーション こうして彼は、親友の川橋君を集会に誘いました。なかなか信仰に入ることの
できなかった川橋君も、半年後にはキリストを信じることができました。しかし、
そんなに伝道熱心な彼も、時には、全く打ちのめされてしまうこともあったので
す。ある時、中学時代からの友人の加来君に会いました。加来君は、竹脇君
のよきライバルで、一緒に麻布高校を受けて、失敗してしまったのです。加来
君はそれ以来グレてしまいました。そこで竹脇君は彼を信仰に導こうと思いま

した。

(効果音) (街の雑踏)

真理 いやぁ加来君、しばらく。今、どうしてる？

加来 …

真理 ねえ、教会に來いよ。少しは気分が変わるぜ。なあ、高校に落ちたくらいでよくよするなよ。君のおふくろも心配しているぜ。

加来 なんだい。一流校に入ったからって先輩面してよ。お前なんかにおれの気持ち、分かってたまるかよ。

(音楽) (真理の心の動揺。ショッキングな感じ)

ナレーション 彼はその時、本当に打ちのめされてしまいました。彼は、自分なら加来君をなんとかできるとうぬぼれていたのです。その夜、彼は神に祈りました。

真理 ああ神様、僕のごう慢さを赦してください。そして、真の謙そんを教えてください。彼を導けるようによい知恵と勇気を与えてください。

ナレーション そんなことがあってから、加来君のお姉さんとお母さんが教会に來るようになりました。竹脇君はその後も友人に伝道を続け、やがて学校で聖書研究会を始めることができました。

(音楽) (賛美歌「立てよ いざ立て」)

ナレーション 彼の信仰は燃えに燃えました。しばらくして開かれた高校生の集会で、彼は海外宣教師になることを決心し、将来の夢は果てしなく膨らんでいくのでした。そんなある日のこと、聖書研究会が終わったあとで――。

加賀美 竹脇、君の頭、デコボコじゃないか。どうしたんだい？

真理 うん。前から気にしていたんだが、このごろ急に目立つようになったんだ。

加賀美 痛むのかい？

真理 うん、少しね。

加賀美 何か変だね。医者に診てもらったのかい？

真理 いいや、まだなんだ。

川橋 早く診てもらえよ。お前は死んでも天国に行くことが決まっているが、おれたちは寂しくなるからな。

真理 お、おい、脅かさないでくれよ。

ナレーション 竹脇君は、以前から頭や腰が痛み、気にはしていたのですが、たいしたことはない、たかをくくっていたのです。でも、それからしばらくして、次第に募る痛みを意を決して病院に行きました。その帰り、1週間ほど前に家族の者たちと交わした会話を彼はぼんやり思い出していました。

(効果音) (以下回想のエコー)

ひろみ(妹) 兄さん、今日、近所にお葬式があったのよ。わたし、お葬式の前を通るのが怖かったわ。

無我(弟) ひろみは弱虫だからな。死んだ人は何もしないさ。

ひろみ そうじゃないのよ、無我兄さん。もしわたしが死んだらって、その時のことを考えちゃったのよ。

真理 でもね、イエス様を信じていれば、死んでも神様のもとに行って、素晴らしい毎日を送れるんだよ。

ひろみ 兄さんは行けるの？

真理 そうさ。イエス様を信じてるもん。

ひろみ じゃ、お母さんや一番上のお兄さんも行けるの？

真理 そうだよ。お前だって、イエス様を信じれば行けるさ。

ナレーション 程なくして、彼は入院することになりました。医者は「この病気はリ्यूマチだからすぐによくなる」と言っていました。病院へは聖書研究会の友人が週に一度は訪ねてくれました。

川橋 やあ、竹脇。今日の調子はどうだい？

真理 まあまあさ。ところで聖書研究会はうまくいってるかい？

川橋 いってる いってる。この前も1年生が2人、「入部したい」って言ってきたぞ。みんな熱心にやっているから安心したまえ。

真理 そうかい。退院したら、僕もバリバリやるぞ。

川橋 その意気 その意気。来年の高校生キャンプも楽しいぜ。君にも伝道してもらいたいのが2、3人いるんだ。

真理 そうかい。じゃ、取っとけよ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション 入院して1か月ちょっとした時、今までの外科から内科の病棟に移りました。彼の体の痛みは相変わらずでしたが、病院内でも伝道熱は盛んで、同室の患者や付き添いのおばさん、担当の医師、看護婦などに、せっせとイエス様の救いの話をしていました。

(効果音) (病室をノックする音)

看護婦 竹脇真理さんのお母様ですね？

母 はい。あの、真理が何か？

看護婦 先生がお呼びですので、診察室にいらしてください。

ナレーション 病室に戻ったお母さんの顔は、青ざめ、少し震えているようでした。

母 真理ちゃん。驚かないでね。今、お医者様から聞いたのだけれど、あなたの本当の病名は脳腫瘍しゅようなんですよって。

竹脇 お母さん、それ本当？

母 もしそれが悪性なら、全身に回って、助かる見込みはないって。

真理 お母さん…。(泣く)

(音楽) (重苦しい感じ)

ナレーション 彼は、目の前が真っ暗になりました。行く手には“死”が真っ黒な口を開けて、待ち構えているのが見えるようでした。そして彼の目の前からは、楽しいキャンプも、将来の伝道者になる夢も、ガラガラ音を立てて崩れ去りました。しかし彼はその闘いに打ち勝ちました。その時の日記に彼はこう記しています。

真理 「7月24日。主は褒むべきかな。不思議な方法で魂は強められ、心は喜んで
いる。2、3日の間、全く失望していた。母も慌て出していたようだ。2人で一緒
になって沈んでいた。ところが今日夕食時、助け主、真理のみ霊が注がれて、
神様のことを語り合って、新しい霊の糧が与えられた。
自然にマタイ伝6章 25 節以下のみ言葉が示された。明日のことを思い煩わな
い野の小スズメ。ソロモンよりも美しく装いをさせられた野のユリ。“すべての
生き物の命、及びすべての人の息は彼の手の内にある。”(ヨブ 12:10)人は
皆、主の定めたその日まで、この滅びゆく肉の体と闘わなければならないのだ。
あの人は百まで生きた。あの人はあんな若死にをした。しかし、その差はなん
と小さいことだろう。
主は昨日も今日も永遠まで変わらない方である。そして我らに今、神様の右に
いますイエス・キリストと同じ、朽ちず、汚れず、しぼむことのない永遠の体が
約束されているのだ。“主が与え、主が取られたのだ。主は褒むべきかな。”
その日は分からない。しかし、その日まで走り通すことができる。“病”や“死”
を恐れる必要もない。」

ナレーション 彼はその後、約半年間の闘病生活を送りました。その肉体の苦しみは、想像
を絶するほどでしたが、ひとたび与えられたキリストにある平安と喜びは、何
者も奪い取ることはできませんでした。そして半年後のある日、全身に広がっ
た腫瘍のため、体中に膿^{うみ}がたまり、石のように硬くなった体で、たびたび呼吸
困難に陥りながら、彼は母親にこう言いました。

真理 母さん。僕が死んでも悲しまないでください。神様から幸いを受けるのだから、
苦しみも喜んで受けなければならないのです。お母さん、しっかりしてください
ね。ただイエス様の十字架を仰ぎ見てください。(苦痛のうめき)お母さん、僕
がどんなに苦しんでも、麻酔だけは使わないで。イエス様の十字架の苦しみを、
少しでもしのぶことができれば、と思っているのです。お母さん、弟や妹たち、
お姉さん、お兄さんをよろしくね。

ナレーション 昭和 35 年 12 月 1 日、楽しみにしていたクリスマスを待たずに、竹脇真理君は
18 歳の若さで天に召されました。しかし、この間に、彼は多くの人にキリストを
伝え、慰めと励ましを与え続けました。彼は、復活の主への信仰のゆえに、市
をも堂々と乗り越えることができたのです。まさしくそれは、“勇ましく高尚な生
涯”でした——。
<完>